

自閉症児の指導過程に関する研究 (1)

—T-CLAC の標準化—

小林 重雄・杉山 雅彦・山根 律子

いわゆる小児自閉症 (Childhood autism) に関する研究も, Kanner, L. (1943) の報告以来35年を経過し, 多くの業績を蓄積してきたといえる。しかし原因論, 治療論を中心に未だ明らかにされていない点が多く, 治療教育の実践家達に尚試行錯誤をくり返させていることも事実である。

本論文は自閉症児の示す自閉症状を整理し, そのレベルをチェックするために開発されてきたチェックリストを吟味し, 正常幼児の資料を基礎に検討を加えようとするものである。本研究で利用されるチェックリストは, 梅津ら (1970) の精研式 CLAC (check list of autistic children) を基礎として構成された, 山形式 CLAC (小林, 1973) を更に改訂したものを使用し, 幼児においては保育園・幼稚園, 学齢児においては小学校の普通学級への適正な導入を考える有力な資料として利用可能にしようとするものである。

1. 自閉症児の診断

Kanner, L. (1943, 1949) は, 基本的には精神分裂病のもっとも早期に出現したものを, 早期性小児自閉症 (early infantile autism) と呼び “極端な孤立, 自閉” と “強迫的な同一性保持の欲求” が主症状であるとした。さらに生育史の上からも, 脳波検査その他の神経学的検査の上からも, 器質的な要因が含まれない症例について自閉症の診断をつけるべきであるとした。

O'Gorman, G (1970) も小児分裂病の枠組みの中で自閉症を考え, 本質的な特徴として6項目をあげている。

- 1) 現実からのひきこもり, とくに人々と正常なかかわりを形成することができないこと
- 2) ある点では正常か, ほぼ正常な, または例

外的な知的機能や技能を伴う重度の知能遅滞。

- 3) ことばを獲得できなかったり, すでに学んだことばを維持し, 向上させたりできず, あるいは伝達手段として獲得されたどんなことばも用いることができないこと。
- 4) 一つあるいはそれ以上のタイプの感覚刺激に対する異常な反応。
- 5) わざとらしさや奇妙な動作のきわだった持続的な現われ。
- 6) 変化に対する病的な抵抗
 - a) 患者自身が周囲のものの行動に儀式ばった動作を固執すること。
 - b) 同一の環境, 設備, おもちゃ, 人への病的な愛着行動。
 - c) 本来の機能を無視して, 特定の対象やそのある種の特徴に夢中になること。
 - d) 環境の同一性がおびやかされる場合に生じるひどい怒り, 恐怖, 興奮, またはひきこもりの増強。

以上の6項にわたる整理はCreak, M (1964) の9つの基準を基礎としてなされたものであるが, 症状記述として広く受け入れられているものである。

筆者らは, 自閉症の診断にあたって, 1) 症状が生後間もなく出現してくること, 2) 対人関係において適切なかわりをもてないこと, を必須症状とし, O'Gorman, G (1970) の2) から5) までの4症状及び6) の4つの下位症状の8症状のうち複数の症状をもっていることを条件として進めている。

しかし自閉症であるかどうかということは実際の治療教育を進めていく場合には前提条件とはならない。自閉症状が認められるかどうか, 認めら

表1 T-CLAC

	1	2	3	4	5	
身 辺 自 立	1 食事習慣	食事に無関心、すべて食べさせてもらう。	スプーン、はしを 用いず、手づかみ などで食べようと する。	スプーン、はしな どを、なんとか使 う。好き嫌いが強 度である。	スプーン、はしな どを使える。好き 嫌いは顕著ではな い。	自ら食事できる。 主食と副食をある 程度バランスをと って食べる。
	2 排泄習慣	オムツ使用	教えることもある が、常に注意して なければならな い。	ほとんど教えるが 衣服の着脱や始末 などに手伝いが必 要。	一応自分でする が、ときどき失敗 する。	ひとりで始末でき る。排尿・排便と も。
	3 衣服着脱	全面的に介助を必 要とする。	ひとりで脱げる が、きられない。	スナップがはめら れる。ジッパーが しめられる。	ボタンもはめられ る。ときに、又は 部分的に援助を要 す。	ひとりで着脱がで きる。
運 動 機 能	4 運動能力	フラフラしたり、 発作的な動きで、 まとまりがまった く見られない。	基本的動作（立つ 歩く）は一応でき る。	歩く、立つなど、 基本的動作は正し くできる。	走る、とぶ、投げ などの基本的運 動はできる。	かなりまとまった 運動ができる。簡 単なルールに従う ことができる。
	5 動作模倣	他人のやることを 見習う意志がな い。	まねようとする意 志は見上げられ る。単純動作1～ 2種類。	身体の一部の動 作あるいは、身体 全体の動作を部分 的にまねることが できる。	かなりよくまねる ことができる。	すべてについて、 年齢相応にまねる ことができる。
課 題 解 決	6 自発性	自発性は認められ ない。すべて無目 的的な反応。	無目的ではある が、突発的に場面 に適切な反応も認 められる。	特定の興味、要求 に基づいた場面 において、しばしば 認められる。	慣れた環境におい て、かなりよく適 切な反応が認めら れる。	一般的な環境の中 でも、適切な自発 的反応が認められ る。
	7 課題解決意欲	課題そのものが無 意味である。	簡単な課題には応 答できる。（やり とり反応、マッチ ング）	基本的課題に注目 し操作する。（4 片以上のパズル、 言語指示による課 題）	多くの訓練課題に 注目し、とりくも うとする。	訓練課題以外の課 題にも注目し、何 とか果たそうとす る。
	8 課題解決能力	課題を理解できず 援助によっても果 たせない。	簡単な課題を果た すことができる。	基本的課題を果た すことができる。	多くの課題を理解 して果たすことが できる。	訓練以外の課題も ある程度、果たせ る。
遊 び	9 テレビについて	関心がない。	消すと怒るが、見 ていない、CMな ら見る。	CMや特定の番組 のみに固執して見 ている。	CMや特定の番組 の他に、子供番組 も見ている。	子供番組をよるこ とで見ている。 （限定されずに）
	10 大人との遊び方	無視、さける。	誘われても遊べな い。	誘われれば遊べ る。	相手を誘って遊ぼ うとする。	相手を誘うし、誘 いにものってく る。
	11 子供との遊び方	無視、さける。	誘われても遊べな い。	誘われれば遊べ る。	相手を誘って遊ぼ うとする。	相手を誘うし、誘 いにものってく る。
集 団 適 へ 応	12 集団適応能力	集団へ関心を全く 示さない。	集団をある程度意 識しているが、身 勝手な行動が多 い。	小集団の中では、 適切な行動がとれ ることが多い。	大きな集団の中で 部分的に適切な行 動がとれる。なん となくまざる。	大きな集団の中で かなり適切な行動 がとれる。
対 人 関 係	13 家族の大人との関係	無関心、無視、さ ける。	たまに適切に反応 する。ハンドリン グによる要求。	自分のペースに合 わせてもらえば相 互作用できる。	特定の人の要求に は反応したり、働 きかけたりする。	みんなとほぼ適切 に交流がある。
	14 兄弟姉妹との関係	無関心、無視、さ ける。	たまに適切に反応 する。ハンドリン グによる要求。	自分のペースに合 わせてもらえば相 互作用できる。	特定の人の要求に は反応したり、働 きかけたりする。	みんなとほぼ適切 に交流がある。
	15 他人との関係 （大人）	無関心、無視、さ ける。	たまに適切に反応 する。ハンドリン グによる要求。	自分のペースに合 わせてもらえば相 互作用できる。	特定の人の要求に は反応したり、働 きかけたりする。	みんなとほぼ適切 に交流がある。

		1	2	3	4	5
対関係	16 他人との関係 (同年輩者)	無関心、無視、さける。	たまに適切に反応する。ハンドリングによる要求。	自分のペースに合わせてもらえば相互作用できる。	特定の人の要求には反応したり、働きかけたりする。	みんなとほぼ適切に交流がある。
言語	17 言語(自発的)	音声なし	エコラリアは見られるが応答にはならない。	場面にそぐわない発言も多いが、ときには応答言語がみられる。	大人とはある程度応答できる。	同年輩の子供とも通常の応答はできる。
	18 言語(訓練過程)	音声なし、母音といくつかの子音が出る。	いくつかの音の連音、簡単な単語のエコラリア、(要求言語はいくつか見られるが独言で内容豊富)	援助すればある程度命名できる。エコラリアの確立。	2語の結合、助詞もある程度使用可能、援助なしに多くのものの命名ができる。	ほとんど応答の形をとることができる。アクセント・エコラリアの問題は、わずかである。
表現能力	19 弁別能力	弁別することはできない。	具体物による弁別ができる。	単純な形や原色による弁別はできる。	やや複雑な形や中間色の弁別ができる。	複雑な形や用途による弁別ができる。
	20 読む能力	文字に頓着しない。	読めないが、文字であることはわかっている。	発声できないが、文字がわかっている。	特定の文字がわかっている。	意味がわかってそれが読める。
能力	21 書く能力	文字らしいものは書けない。	なぞり書きができる。	見て書くことができる。	音声を文字で表わすことができる。	あらわしたいことを文字にできる。
	22 絵画製作(その1)	材料に頓着せず、描こうともしない。	なぐり描きができる。	線描きで一応ままと描けたものが描ける。	まとまったものが描ける。彩色できる。(1~2色程のものでもよい)	ものと背景を描ける。何種類かのものを描ける。
	23 絵画製作(その2)	ぜんぜん何も描こうとしない。	なぐり描きで形はなさない。	いくつかの部分が指示のもとに描ける。	指示すれば一応人間の形となる。	指示しなくても人間の形を描くことができる。(5~6才水準)
指従示うに	24 指示に従う能力	指示に従うことはほとんどできない。	禁止制限などは強制すれば従うことができる。	禁止、制限だけでなく興味や要求にそった指示には従うことができる。	興味や要求にそったものだけでなく一般的な指示に対しても従える。	一般的なものに対してもかなりよく従うことができる。

氏名: _____ 生年月日: 昭和 ____ 年 ____ 月 ____ 日 (才)

れるとすればその強さはどの程度であるかということが、実際のプログラムを構成するにあたって重要な問題となる。

2. 自閉症児の発達評価

自閉症状がどのような過程を経て形成されてくるかという問題については小林(1976)が論じているが出生直後からすべての症状が顕著に表われてはいない。また幼稚園など一般児童と混合して、そこで適切な役割をもてるようになるためには自閉症状の軽重ばかりでなく、全般的な発達水準が一定のレベルにまで達していることが要求される。

幼児においては、話しことばの表現能力・理解能力、遊びの種類、ルールの理解、絵画、工作の

遂行能力、お遊戯、歌の表現能力のレベルが同年令集団にどの程度対応するようになってきたのかということが、自閉症状の改善の程度と同様に幼稚園などに適応していくのに重要な要因となる。

幼稚園などでは自由保育を主体とする考え方をしているところもあり、いわゆる教科学習的な要素はあまりなく、自閉症状に基づく反応についても許容範囲はより広い。しかし小学校への入学にあたって、適切な役割をもって参加できるかどうかについては、自閉症状の改善と全般的な発達レベルが T-CLAC の最高段階の5段階にまで達しているかどうかにかかっている。

幼児期の自閉症児の治療教育の目標は、一応小学校の普通学級へ特別な手立てを講じることなく

他児と同様に入学し学習に参加できるようにすることと考えられる。そのために、いかなる指導プログラムを構成し、いかなる教育場面を設定していくかが問題となる。

3. T-CLAC の正常児についての検討

1) Y-CLAC の修正

自閉症児の発達段階をチェックし、指導にあたっての指針とするために、身辺自立、運動機能、課題解決、遊び、集団への適応、対人関係、言語表現能力、指示に従う能力、の9領域、24項目にわたる、発達チェックリストとしてY-CLACが

考案された(小林, 1970)。このリストを用いて自閉症児の検討を行なったところ若干の問題点が生じたため修正の必要が生じている。

Y-CLAC においては、いくつかの点で表現があいまいであり解釈上に差があった。その点をより具体的でかつわかりやすいものに修正し T-CLAC を製作した。

2) T-CLAC の内容

Y-CLAC と同様、9領域、24項目を段階にわけてチェックを行ないサイログラムにプロフィールを記入する。(表1)

3) T-CLAC の検討

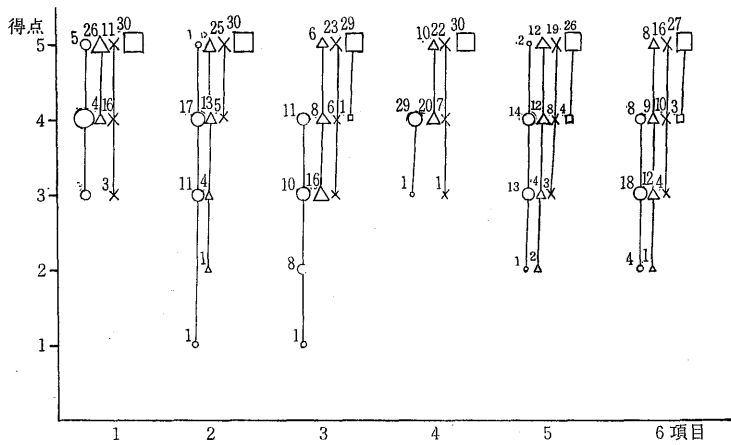


図1 項目別年令得点表 1~6

○—2才児 △—3才児 ×—4才児 □—5才児, 左肩の数字は人数を示す

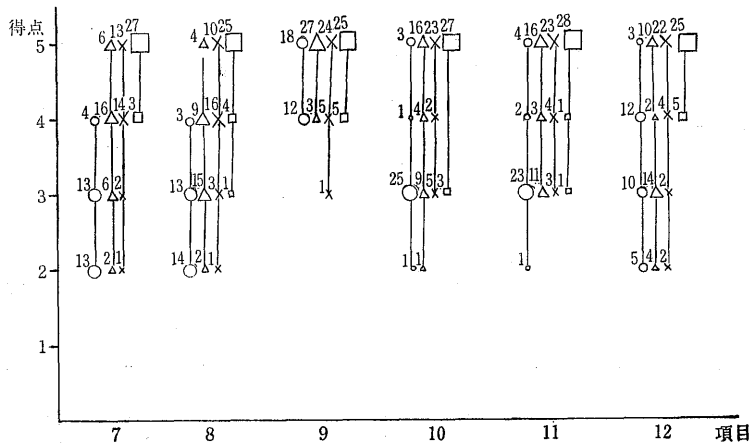


図2 項目別年令得点表 7~11

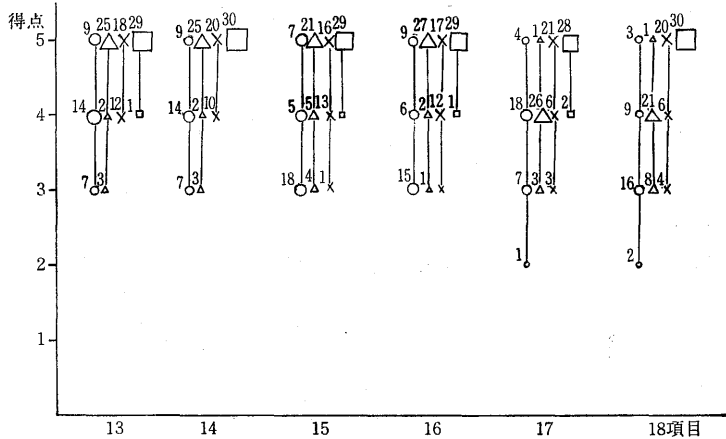


図 3 項目別年令得点表 13~18

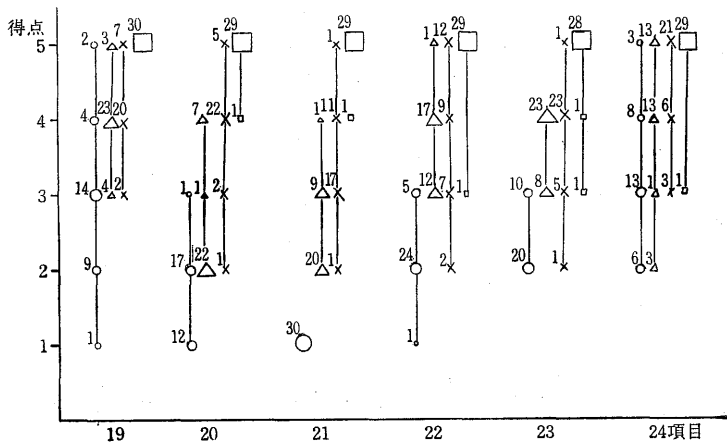


図 4 項目別年令得点表 19~24

①方法

F 保育園で 2 才～5 才の普通児各 30 名，計 120 名を対象に T-CLAC チェックを行なった。評定は，担当の保育士に依頼した。また，信頼性を評価するため，2～4 才の各 10 名をランダムに選択して再テストを行なった。

② 結果

項目別に，年令ごとの各得点人数を図 1～4 に示す。年令と得点間との関係は， χ^2 検定の結果，項目(9)を除き，全て 1%水準で年齢間の差が有意であり(表 2)，年令にそって高得点をうる傾向がみられた(図 5)。

次にテスト-リテスト間の相間を表 3 に示す。項目(18)が特に相関が低く，項目(5)(6)(9)(11)(13)(15)(19)(24)においても信頼性が低かった。

4. 普通児の発達評価と T-CLAC の項目の特徴

T-CLAC の項目は大別すると，身辺自立(1～3)・運動機能(4，5)・課題解決(6～8)・遊び(9～11)・集団への適応(12)・対人関係(13～16)・言語(17，18)・表現能力(19～23)・指示に従う(24)の 9 領域，24 項目よりなっている。これらの項目の中で，5 才時において最も平均の低かったものでも，4.80(8，10)の値を示しており，T-CLAC の項目は 幼稚園終了段階においてすべて達成されているべきものと考えられた。

項目により発達尺度と非発達尺度が存在することが明らかになった。9 は一定段階に集中する非発達尺度と考えられ，年齢の進行によって評価段階が上昇するというより，自閉症状の程度によ

表 2 項目別 χ^2 検定の結果

項目	n	χ^2	df	1%水準
(1)	120	59.12	3	○
(2)	120	69.76	3	○
(3)	120	99.94	9	○
(4)	120	69.77	3	○
(5)	120	46.42	6	○
(6)	120	66.05	6	○
(7)	120	96.01	9	○
(8)	120	98.82	9	○
(9)	120	8.80	3	N. S.
(10)	120	61.19	6	○
(11)	120	53.75	6	○
(12)	120	56.50	9	○
(13)	120	70.36	6	○
(14)	120	38.78	3	○
(15)	120	58.09	6	○
(16)	120	63.20	6	○
(17)	120	75.36	6	○
(18)	120	92.94	6	○
(19)	120	131.44	6	○
(20)	120	261.61	12	○
(21)	120	283.37	12	○
(22)	120	157.75	9	○
(23)	120	184.43	9	○
(24)	120	68.27	9	○

表 3 test-retest 間の相関

項目	n	r
(1)	30	.90
(2)	30	.76
(3)	30	.69
(4)	30	.81
(5)	30	.51
(6)	30	.55
(7)	30	.84
(8)	30	.76
(9)	30	.41
(10)	30	.63
(11)	30	.57
(12)	30	.97
(13)	30	.46
(14)	30	.86
(15)	30	.56
(16)	30	.45
(17)	30	.68
(18)	30	.05
(19)	30	.68
(20)	30	.81
(21)	30	.91
(22)	30	.61
(23)	30	.68
(24)	30	.54

T-CLAC PSYCHOGRAM

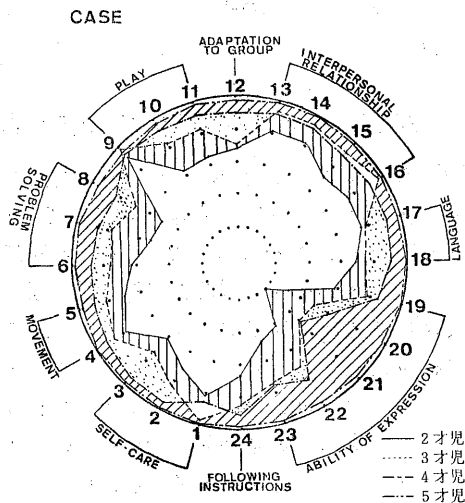


図 5 T-CLAC による 2~5 才児のプロフィール

て規定される。したがって、自閉症児と普通児ではその項目において、大きな差異を示すと考えら

れる。また対人関係 (13, 14) においては、15, 16も含めて早期よりほぼ上限に達し、自閉症児においては改善の困難な対人関係項目で、普通児では早期に一定の水準まで達することのできることを示している。

発達尺度と考えられる他の項目は、ほぼ年齢によって段階が上昇していくが、特に 20, 21 に関しては 2 才から 5 才までの幅が大きく、その段階の上昇プロセスも明確にあらわれている。

1) 各項目の特徴

身辺自立 (1~3)

各項目とも 4 才でほぼ上限に達する。2 才レベルで器具の使用、操作などは、基本的にはほぼ自立あるいはそれに近い状態に達している。5 才では全員 (3 での一名を除く) が上限に至った。

運動機能 (4, 5)

3 才では 4 の段階に達し、4 才から 5 才にかけて上限に達している。

課題解決（6～8）

各項目とも2才で3段階、3才で3段階以上、4才で4段階以上、5才で上限といった同様の傾向を示している。従って普通児と自閉症児を比べると、2才ではその差は大きくないが、年齢の上昇と共にその差が広がっていく領域である、と予想される。

遊び（9～11）

この領域では各項目とも極めて早期に完成の段階に達している。特に9においては、2才時ですでに達成のレベルにある。10、11においても3才で4段階以上の値を示している。これは T-CLAC が自閉症児の特性に合わせて作成されているためと考えられる。すなわち、当領域は普通児と自閉症児の差が大きく、診断および訓練において関心がはらわれねばならない領域といえよう。

集団への適応（12）

3才と4才の間に差が大きく、2才と3才、4才と5才の間には顕著な差は見られない。すなわち就学へ至る集団適応の能力は、ほぼ4才時に完成されていると考えることができよう。

対人関係（13～16）

当領域の項目ではすべて3才時にほぼ上限に達している。特に家族との関係（13、14）は、2才時に4段階へ達しており、相互作用が可能であることを示している。15、16を考慮しても、3才ですでに適切な交流ができ得ることが示されている。この領域は、遊びの領域と同じように極めて早期に完成の段階に至り、自閉症児と普通児の間に大きなへだたりが生じるであろうことが予想される。また対人関係障害は自閉症状の中核（上出1967）とされるところから、診断時にこの領域に関して注意深い検討が必要であると考えられる。

言語（17、18）

自閉症児の治療教育、あるいは訓練の場において問題とされ、議論されることの多いのがこの領域である。17、18において、3才と4才の間に他と比してやや大きなへだたりが見られる。また18については前述の通り信頼性が低く、その原因は訓練過程をむりに普通児にあてはめたためと考えられる。

表現能力（19～23）

2才時の段階は他領域に比して明らかに低い。特に20、21は1段階台である。しかし全項目とも5才時には上限に達することから、2才から5才にかけて普通児では表現の領域が大きく伸びると考えてよからう。一般に自閉症児は対人関係の悪さと同時に、表現能力が劣るといわれている。この領域での結果から、2才時では普通児と自閉症児の差は目立たないが、3才頃よりその差があらわれ、4才5才と差が広がっていくであろうと予想される。従って出来るだけ早期に自閉症児の訓練を始め、この領域の遅れをカバーすることが必要となろう。特にこの領域は就学後の教科学習と密接な関係があると考えられ、就学前にこの領域は完成されているのが望ましかろう。

指示に従う（24）

3才で4段階以上の値を示しており、2才から4才にかけて指示に従うことが可能となることが示されている。2才時においてすでに3に達しており、集団を意識する段階にきている。また、当項目は12との関係が指摘できるかも知れない。自閉症児が幼稚園、小学校などの集団に参加していく場合、当項目の段階がその成否を左右する要因となると思われる。従って、自閉症児の訓練において、いかに指示に従う能力を児童に獲得させるかは、後の発達に大きく影響するであろう。

2) 各年令の CLAC サイログラムの特徴

各年令の CLAC サイログラム（図-5）から5才時では全領域、全項目が完成され円状となるが、2才、3才、4才と円状に発達するのではないことは明らかである。2才時では14と2を結ぶ線を長軸に、8と20を結ぶ線を短軸とした、だ円形に近い。すなわち身辺自立、運動機能、対人関係はすでに高い段階にあるが、それに比して課題解決や表現能力はまだ低い。特に表現能力の20、21、22、23は他の項目と比し極端に低い。しかし3才時になると課題解決、遊びが伸び、1と16を結ぶ線を底辺とし、9を頂点とした三角形の形状に近づく。20、21はこの時点においてなお、他の項目より低い。4才時になると表現能力が大きく伸び、ほぼ円に近い状態になり、各項目が同じような段階に達する。以上の各年齢のサイログラムの

特徴から、各領域、各項目によってその発達の過程は異なるが、5才時には完成に達すること、課題解決能力、表現能力は特に他の領域より遅れて発達するが、3才、4才とその伸びが著しいことが、T-CLACにおける普通児のプロファイルの特徴であると言えよう。

5. 摘要

本研究では自閉症児の発達をチェックし、指導の指針とするため、T-CLACが作成され、検討された。T-CLAC 身辺自立(1~3)運動機能(4, 5)課題解決(6~8)遊び(9~11)集団への適応(12)対人関係(13~16)言語(17, 18)表現能力(19~23)指示に従う(24)の9領域。24項目にわたっている。

2~5才の普通児各30名を対象にT-CLACのチェックを行った。信頼性評価のため、2~4才の各10名をランダムに選択し再テストを行った。

年齢と得点間の関係は x^2 検定の結果、9を除き全て1%水準で年齢間の差は有意であった。test-retestにおいては項目18が特に相関が低かった。この項目は言語訓練に関するものであり普通児を対象に評価することに無理があった。

9領域項目すべてが幼稚園終了段階で完成されるものと考えられた。また、それぞれの項目に発達尺度と非発達尺度が存在することが明らかになった。9は非発達尺度と認められた。13, 14なども同様に、早期にほぼ上限に達し、年齢よりむしろ自閉症状に規定される項目と考えられた。発達尺度と考えられる項目のうち、特に20, 21に関しては2才から5才までの幅が大きく、その発達の

プロセスも明確にあらわれている。

以上のことより、T-CLACの項目に発達尺度非発達尺度が存在するが、普通児では5才時にすべて完成されることが明らかになった。したがって自閉症児が、就学時において全領域が完成されているならば、普通学級において相当程度の役割をもって活動することが可能であろう、と期待される。

引用文献

Creak, M. et al (1964); Schizophrenic Syndrome in Childhood. *Develop. Med. Child Neurol.* 6, 530-535.

上出弘之(1967); 幼児自閉症の概念について。児童精神医学とその近接領域, 8, 53.

Kanner, L (1943); Autistic disturbances of affective contact, *Nerv. Child*, 2, 217-250.

Kanner, L (1949); Problems of nosology and psychodynamics of early infantile autism. *Am. J. Orthopsychiat*, 19, 416-426.

小林重雄(1976); いわゆる自閉症児の症状形成に関する考察。東京教育大学教育学部紀要, 20, 145-150.

小林重雄(1973); 自閉症児の診断に関する行動療法的考察。山形大学紀要(教育科学) 5, 4, 345-362.

O'Gorman, G (1970); *The Nature of Childhood Autism*. Butterworth & Co., (白橋宏一郎監訳「子どもの自閉症」北望社)

梅津耕作, 篁一誠, 三芳隆史, 角張憲正, 近藤恭子, 佐藤ゆみ, 牧田清志, 倉沢志津子(1970); 自閉症児の行動療法(V)精研式CLACの作成。精医研業績集, 17, 85-103.

Summary

The Study on Therapeutic Process of Autistic Children (1)

—Standardization of T-CLAC—

Kobayashi, Shigeo. Sugiyama, Masahiko. and Yamane, Ritsuko

T-CLAC (check list for autistic children) was designed for checking the developmental level in autistic children. T-CLAC includes 9 areas and 24 items ; Self-care (1~3), Exercise (4~5), Problem-solving (6~8), Playing (9~11), Adjustment to group (12), Interpersonal relationship (13~16), Speech (17, 18), Expression (19~23), Following instructions (24).

Method

T-CLAC was administrated to 120 normal children in the ranges of 2 to 5 years old, numbers at each age levels were 30. 10 children of each age at random, 2 to 4 years, were selected for retesting to estimate the reliability of T-CLAC.

Result and Discussion

It was demonstrated that evaluated scores on all items showed the significant changes on the process of 2 years to 5 years except for those on item "9". It was also showed the relatively low correlation between test-retest of item "18".

All of 24 items are designed as achieving at the 5th grade in evaluating with the 5 years normals. And, it was clear that 24 items were divided developmental scale and non developmental scale. The evaluated score are proceeded in accordance with the ages in the developmental scale. Non-developmental scale are proceeded, however, according to the modification of autistic symptoms. Items. "20", "21" appeared to be typical developmental scales, which were proceeding in accordance with the age of 2-5 years. Not only item "9" appeared to be a typical non-developmental scale which were evaluated as the 4th-5th grades during ages of 2-5 years but also items "13", "14" were evaluated the 4th-5th grades during 3-5 years.

It was shown that 5 years normal children achieved at the 5th grade in all items of T-CLAC. It would be expected, therefore, autistics would function and behave adequately if they developed at the 5th grade in all items almostly.